

国立国語研究所学術情報リポジトリ

動詞を中心とした語彙の分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISHIWATA, Toshio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001031

動詞を中心とした語彙の分類

石 綿 敏 雄

0. 概 要

これは、昭和 45, 46 年度文部省科学研究費による総合研究(A)「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究」(代表者岩淵悦太郎)に関する報告の一つである。

この研究報告は動詞を中心に、日本語の用語および文法を総合的に記述することを目的とし、その利用において電子計算機による処理を考えているものである。筆者はすでに「人間の精神活動を意味する動詞の用法」(国語研報告 49), 「自然現象を意味する動詞の用法」(国語研論集 4), 「抽象的關係を意味する動詞の用法」(本報告 p. 000)において、日本語の動詞の用法をその valence を中心として、ひとわたり分析した。これらの分析の結果を用いて、この報告では、用法を中心として動詞の分類を行ない、それによって日本語の文型を概観し、次にその文型のそれぞれのポジションに現われる名詞をその現われ方によって分類しようとしてみた。そしてそのことから、語彙論的に語彙を記述する方向について考えてみたのである。

従来の国語学では文法論と語彙論の記述を峻別する傾向が著しく、文法の問題と語彙の問題とのかかわりあい、一部の人々を除いては、全く問題としなかった。これは文法論にとっても語彙論にとっても、これを不毛のものとするものであって、大変不幸であったと思う。筆者は言語情報処理の立場からむしろ積極的にこの問題を取りあげることを考えた。これについては国語研報告 31, 34 所載の小論などで述べたつもりである。また一方筆者らが行なっている用語調査、語彙記述についても、筆者の視座ということについて本報告はふれるところが大きい。

先述の筆者の動詞分析の三論文はその企画にあたって方法上にも十分の用意が必ずしもなく、使用データもきわめて制限されたものであった。この分析をすすめてゆく上で、方法的にもさまざまな知見が得られたし、データも時間の経過とともに増加し、数倍になっている。しかしいわば計量的な観点もふくませてあったので、あとから得られたデータをさしはさむことはしなかった。この報告では三論文のデータをもとにしているが、その後得られたデータを適宜挿入して用いたところがある。しかしもちろん完全でなく、むしろ試行的である。そこで、もちろんこの報告も中間（それもはじめに近い中間の）報告である。問題を予見するためのパイロットサーベイでもある。こまかな点はすべて切りすて、省略、見のがした。ミクロはすべて捨ててマクロのスケッチを行なったのである。

この分析は筆者がフランス国立科学研究中央機関(CNRS)の研究者としてフランス滞在中、グルノーブル大学の機械翻訳研究センターにおいて、日本語の自動解析の研究の一部として行なったものである。原稿執筆終結時間のずれの関係で、日本語による報告文作成が先行し、したがってよりあらいものとなった。修正を含んだより詳細な研究はフランス文で作成する予定である。

1. 用法による動詞の分類と文型

はじめに動詞の用法について分析したが、これは上記三論文にみられるとおり、動詞を「分類語彙表」の分け方にしたがって、抽象的關係、人間の精神活動、自然現象の三つに分類し、それぞれのグループごとに分析を行なった。いま、その分析結果によって全体をもういちど分類しなおしてみることにはしたい。分類にあたってはこの分析の方針が動詞の valence に基づいているために、もちろん valence に重点が置かれるが、従来の valnce の理論ではどちらかというといくつの valence があるかということに重点を置いたものが多い。本論文では valence は動詞の意味に強く関係した一つのめじるしであるという考え方に立っている。それは同じく valence といっても、のちに述べるように、動詞の意味のなかにこれに基本的に対応するものがあること、「が」「を」「に」などと「よ

り」「から」「で」などのグループでは基本的な相違があり前者がいわばオプリーガトリーであるのに対して後者がどちらかというオプショナルな面があること、いわば前者はかなり固定的で強い支配であるのに対し、後者は流動的で弱く、臨時的な面があること、によるのである。「が」「を」「に」が強い支配のものであることは渡辺実氏も「国語構文論」のなかで述べておられる。

valence は動詞の意味に関連したものだという認識に立つと、それは動詞の意味を重要視した分類にならざるをえなくなる。単にいくつかの valence があるかということだけでなく、その先にどんな性質のものがなければならないかということも同時に存在するはずである。valence の本来の意味もそうであると考えられる方向もあると思う。すると valence の数、「が」「を」「に」「へ」「で」などのどれとどれをとるかということだけでなく、その前にくる名詞がどんな種類のものか、が動詞の意味に関係するからである。「に」の前に、「時間」がくるか「人」がくるか「場所」がくるかで、この働きは、動詞の意味に対して全く別なものとなり、これを混同することは許されない。そこで、ここで行なう分類は、単にいくつかの valence があるかというだけでなく、いわばその質を問題にし、名詞の種類を重要視してゆくことにする。

このような行き方に対して、格助詞については広くこれをさぐり、この面からだけで分類して行こうとする行き方ももちろんある。これはその意味で客観性があり、valence の理論からするとオーソドックスな方法である。この方向にあるものとして大久保忠利氏のものがある。

さて筆者の立場にもどって、このような立場をとるにいたったのは、上記動詞用法分析三論文で得た次のような結論によるのである。

- (1) 他動詞の主語は人である。
- (2) 他動詞の目的語と自動詞の主語は対応することがある。
- (3) 受身変形、可能動詞の派生などにあたっては、この(2)の現象に準じて、「を」「が」が交替する。
- (4) 自然現象の表現は、日本語では自動詞を用いるのが基本である。
- (5) 人間の行動でも自動表現がある。

(6) そのほかに抽象的な関係を表現するいくつかの動詞がある。

以上の結論のなかには、他動詞の主語は人であるといっているなど、かなり大きな省略が行なわれている。これは計量的な見地からすると、有情表現としても、人間行為としてもほとんど差がないからである。したがってそのように読みかえても差しつかえない。その他にもマクロ的なみかたがある。

さて次に、分析した動詞すべてを扱うのではなく、それぞれのグループのなかからティピカルなものを選び出すことにし、百語あまりを選んだ。そうしてそのそれぞれの *valence* と結合する名詞の種類をごくあらう規定した。この際ミクロの相違を問題にすると全体の整理がしきれなくなることを考えて、細部を大いに省略した。したがってできあがったものはマクロ的にみることしかできない。

その百余語とは次の通りである。()内はグループ名。

あう (1v-49), あがる (1v-42), あける (1v-46), あげる (1v-42), 集める (1v-48), 浴びる (1v-5), あらわす (1v-11), 現われる (1v-11), ある (1v-10), 言う (v3-19t), 行く (1v-39), いる (1v-10), 要る (1v-16), 動かす (1v-27), 動く (1v-27), 失う (1v-15), 選ぶ (v3-9t), おこす (1v-12), 行なう (v3-31t), おこる (1v-12), 教える (v3-37t), 思う (v3-8t), おろす (1v-43), 変える (1v-21), 代える (1v-23), かかわる (1v-1), 書く (v3-20t), かける (1v-31), 借りる (v3-46t), 考える (v3-8t), 感じる (v3-1t), 関する (1v-t), 聞く (v3-16t), 決める (v3-11t), 着る (v3-24t), くる (1v-39), 計画する (v3-13t), こおる (5v-10), ことなる (1v-2), 困る (v3-2i), 咲く (5v-12), さげる (1v-42), 死ぬ (5v-13), 調べる (v3-10t), すずめる (v3-38t), 澄む (5v-4), する (v3-31i), する (v3-31t), たずねる (v3-33t), 経つ (1v-62), 立つ (1v-29), 食べる (v3-24t), 保つ (1v-16), 足りる (1v-64), 違う (1v-2), 使う (v3-52t), つく (1v-33), つく (1v-1), つく (1v-50), 作る (v3-53t), 続く (1v-25), 続ける (1v-25), 包む (1v-4), できる (1v-12), 照る (5v-7), 出る (1v-38), とまる (1v-28), 取る (v3-30t), 流れる (1v-34), なぐさめる (v3-2t), 並べる (1v-52), なる (1v-12), 似る (1v-2), 脱ぐ (1v-3), ぬれる (5v-5), 残る (1v-14), 乗せる (1v-43), 望む (v3-5t), 飲む (v3-24t), 乗る (1v-43), はいる (1v-38), はさむ

(1v-7), はじまる (1v-24), はじめる (1v-24), 走る (1v-34), 働く (v3-23i), 離す (1v-51), 光る (5v-1), ひきうける (v3-34t), 響く (5v-3), ふえる (1v-58), 吹く (5v-9), 降る (5v-8), ふれる (1v-50), 待つ (v3-5t), まわる (1v-26), 見える (v3-14i), 見せる (v3-15t), 見る (v3-14t), むく (1v-63), もえる (5v-11), もつ (v3-41t), もらう (v3-45t), 休む (v3-23t), やる (v3-45t), やる (v3-31t), 呼ぶ (v3-18t), 読む (v3-21t), よる (1v-1), わかる (v3-8i), わたす (1v-33)

動詞の選択にあたっては、自他対応のあるものはいくつかをのこして、一方を省いた。「である」「ている」「てしまう」などは省いてある。上位語や基本的なものはなるべく取りいれた。もとのデータの性質から、一般的で基本的なものをえらぶことは比較的容易である。以上の表は一種の索引としても利用できると思う。

さて上掲の動詞を分けるにあたってさきに示した6個の結論を適用するのである。はじめに6を用いて、

1. つく, 関する, よる, かかわる
2. ある, なる, する (気が), できる, 要る, 足りる, 経つ, 似る, 違う, 異なる

をとりだすことができる。1.と2.に分けたのは、1.がかなり形式的で、主として助詞「に」としか結びつかず、「が」の表現がないからである。2.のグループは全体として、主語がかなり多くの種類の名詞で構成し得て、自動表現であるということである。主語の種類については少し問題のあるものもあるが(「できる」「する」「足りる」「経つ」など)、もし必要があればこれらを別立するか別のグループに移すことにして、いまとりあえずこのグループに入れておく。「なる」「似る」「違う」「異なる」などのグループでは「が」「に」「なる」「が」「と」「ことなる」などのフレームがあるのみで、内容が動詞との関連においてあるのでなく、「が」「に」「と」などの前の名詞どうしの間の関係が強いことに特徴がある。いまこれらを含めて抽象関係グループと呼ぶことにする。「ている」「ておく」「てしまう」「である」などを(1)のグループに加えてもよからう。

次に結論(2)を用いて、少なくとも一部に自他の対応のあるものをとりだす。こ

のうち、結論(4)の自然現象関係のものはあとまわしにすることにし、そのうちの自動詞の方をとりだすと次のようになる。このなかの細分は次の4.のそれに対応させてある。

3. みえる (3.11)

現われる、回る、動く、止まる、立つ、乗る、出る、はいる、あがる、

つく (3.12)

おこる (3.2)

残る、始まる、続く、ふえる (3.3)

わかる (3.4)

この3.に対応する他動詞が4.の人間活動の動詞であり、それとこれとの間に「が」と「を」の対立があるはずであるから、この種類すなわち3.の類の主語はいろいろになるはずであるが、

3.11, 3.12 では具体物

3.2 では人間行為（「おこる」では自然現象のこともある）

3.3 では状態その他

3.4 では内容、言語

などが主語になるのがふつうであろう。3.12 ではその他に+loc.の「に」がつく。

さて前述の4.のグループで、これは人間行為を示す他動詞であるが、このグループを「を」の前の名詞でまず分け、次に+loc, +humの「に」で分けると次のようになる。

4. 使う、失う、見る、とる、もつ、作る、選ぶ (4.11)

あける、もやす、浴びる、脱ぐ、着る、飲む、食べる (4.111)

あらわす、並べる、はさむ、包む、集める、かける、おろす、下げる、

代える、動かす、離す (4.12)

やる、もらう、借りる、渡す、見せる (4.13)

起こす、決める、計画する、引き受ける、すすめる、行なう、する、やる、望む、始める、続ける (4.2)

調べる, たもつ, 変える, むく (4.3)

思う, 考える, 感じる, 続む, 書く, 聞く (4.4)

教える, 言う (4.41)

呼ぶ, たずねる, なぐさめる, 待つ (4.5)

このうち, 4.11~4.13 までは「を」の前が主として具体物, 4.2 は人間行為, 4.3 は状態その他, 4.4 は内容言語, 4.5 は人になるものである。ただし, 4.2 から 4.4 までは十分整理ができていない。「始まる」「続く」など自動詞では状態があるが, 他動詞「始める」「続ける」などは人間行為がほとんどである。4.11 と 4.111 の相違は, 4.11 では一般に広く具体物が用いられるのに対し, 4.111 は名詞が限定される傾向がある。たとえば「飲む」の目的語は「水」「コーヒー」「ジュース」「酒」など「飲みもの」である。4.12 は+loc. の名詞に「に」がつくもの, すなわちある程度動きのあるもの, 4.13 は+hum. に「に」がつくもの, すなわち対人的行為のもの, 4.41 も同様に対人的行為のものである。

人間の行為に関するものでも自動詞のものがある。筆者はさきに, 他動詞は人間の行為を表わす, といったが, その逆は真ではない。もっともこのなかには, 人間の行為というグループには入れにくいものもあるが, 少し広く考えてそれも含めてある。

5. いる, 行く, 来る, つく, 走る (5.1)

あう (5.2)

ふれる (5.3)

働く, 休む (5.4)

困る (5.5)

などである。5.1 は+loc. の「に」が, 5.2 は「人」の「に」が, 5.3 は物に「に」が, 5.5 は「行為・状態など」に「に」がつく。この 5. のグループには他動詞があまり用いられないものが多い。もし他動詞があると判定したばあいには 3. のグループに入ればよいのである。

次は自然現象である。これは

6. 光る, もえる, こおる, 吹く, 降る, 照る, 澄む, ひびく, むれる, 咲

く、死ぬ、流れる

などである。+loc. の「に」がつくことがあるがかなりオプショナルなので、いままかりに省いた。

以上は助詞「が」「を」「に」とその前の名詞の種類によって動詞を分けたものである。大きく分けて六類としたが、こまかくも分けてある。いまこれを細分化した形で、もう一度書いてみる。valence からみた一種の文型表のようになろう。Nは名詞、Vは動詞である。

- ① N〔自由〕にV（つく、関する）
- ② N〔いろいろ〕がN〔+loc.〕にV（ある）
- ③ N〔いろいろ〕がN〔いろいろ〕にV（なる、似る）
- ④ N〔いろいろ〕がV（できる、要る、足りる）
- ⑤ N〔いろいろ〕がN〔いろいろ〕とV（違う、異なる）（以上→2.）
- ⑥ N〔具体物〕がV（見える）
- ⑦ N〔具体物〕がN〔+loc.〕にV（現われる、動く、立つ）
- ⑧ N〔人間行為など〕がV（おこる）
- ⑨ N〔状態など〕がV（残る、はじまる、続く、ふえる）
- ⑩ N〔内容〕がV（わかる）（以上→3.）
- ⑪ N〔人〕がN〔具体物〕をV（使う、見る、とる、もつ）
- ⑫ N〔人〕がN〔具体物〕をN〔+loc.〕にV（集める、おろす、あげる）
- ⑬ N〔人〕がN〔具体物〕をN〔人〕にV（やる、もらう、見せる）
- ⑭ N〔人〕がN〔限定具体物〕をV（脱ぐ、飲む、燃やす）
- ⑮ N〔人〕がN〔人間行為〕をV（する、行なう、きめる、引きうける）
- ⑯ N〔人〕がN〔状態など〕をV（調べる、保つ）
- ⑰ N〔人〕がN〔内容・言語〕を、とV（思う、考える、感じる、読む）
- ⑱ N〔人〕がN〔内容・言語〕を、とN〔人〕にV（教える、言う）
- ⑲ N〔人〕がN〔人〕をV（呼ぶ、訪ねる、なぐさめる、待つ）（以上→4.）

- ⑳ N〔人〕がN〔+loc.〕にV（いる，行く，来る，つく，走る）
- ㉑ N〔人〕がN〔人〕にV（あう）
- ㉒ N〔人〕がN〔具体物〕にV（ふれる）
- ㉓ N〔人〕がN〔原因など〕にV（こまる）
- ㉔ N〔人〕がV（働く，休む） （以上→5.）
- ㉕ N〔自然物〕がV（光る，吹く，降る，咲く） （→6.）

以上が動詞のごく大まかな分類である。そして全くの試案である。語数をふやし見方をくわしくすれば数がふえよう。それが以上のような一種の文型表としても展開でき，つまり一種の valence による動詞の分類であることを示したつもりである。

この分類にあたっては，かなり多くの省略，切りすてがあり，未整理のところもある。動詞の用法の分析をさらにくわしくし，そしてそれをのこりなく反映させてゆくことが必要であろう。この分類では筆者の三つの論文の内容すら十分には反映していないのである。

このなかで名詞の分類のところが未整理のところもあったので，それに関して次に少し考えておきたい。なお，名詞の分類で具体物という分類を大きく立てたのは，筆者とかつて共同作業をした福渡淑子氏の見解を継承したものである。

2. 名詞その他の分類

名詞をクラシファイすることはすでに動詞のクラシフィケーションのなかで行なってきたことである。動詞をクラシファイするために名詞をクラシファイし，その結果を用いて再び名詞をクラシファイするのである。

その方法はもちろん動詞の文型のそれぞれのポジションにどんな種類の名詞が現われるかをみるのであり，それが名詞のクラスとなる。

ところでさきほどの分類では，いつ (when) ということを入れておかなかった。これは多くの動詞に共通であるから特に入らなかったのである。時を示す

名詞が一種のカテゴリーを形成していることはいうまでもなかろう。従来の国文法でも「時数詞」ということがいわれたことがある。この論文ではそれも一つの名詞のクラスとして、取り扱う理由をつけるのである。すなわち「きのう」「きょう」「来年」などは一つのクラスになる。そうすればかなり多くの動詞に対する「+loc.」もまたひとつのクラスをもつと思われる。「人」「人間関係」もこのようにしてクラスを立てることができる。このような分類が単に従来の意味での語彙論においてだけのクラスでなく、シンタクスと、したがって日本語の用語の運用面と十分の連絡をもった用語のクラシフィケーションにおけるクラスと考えることができる。「いつ」「どこで」「だれが」と来たからには「何を」という人間の行動を示すものが一つのクラスになることは言うまでもない。「いつ」は単に動詞の連用修飾語になるだけでなく、「いつが」「いつの」と他の働きもするので（他の助詞を伴って）、これらの名詞がセンテンス・パタンのさまざまなポジションに現われうるのであるが、それらは、「いつ」というワード・クラスでひとまとめにすることができよう。「どこ」「なに(を)」も同様である。筆者の語彙記述の全体像を示すわけにはまだ行かないが、これらが大きな区分になることはいうまでもない。

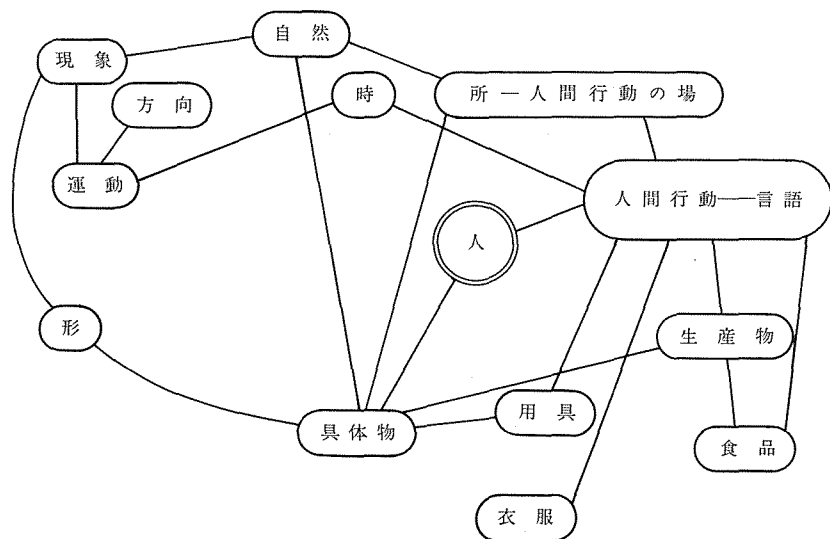
この「なにをする」という表現では「する」という動詞に対して、その前に「人間の行為を示す名詞」がくる、ということは前記三論文で示したとおりである。これは「する」ばかりでなく「やる」も「行なう」も同様である。このように、この一連の分析ではこのような一種の syntaktisch なあるいは semantisch なメルクマールを求めることを行なってきた。上記の「とき」「ひと」というのも、このメルクマール（そのなかでもきわめて有効なメルクマール）であった。そこでここでは、この上に立って考えてゆくのである。syntaktisch なメルクマールと semantisch なメルクマールは区別しきれない、という考え方に立っていることはもちろんである（ベッヘルトなど）。

そこでいまだに行なってきた分析のなかから、このようなメルクマールを拾い出してみると次のようである。

人 物品 金品 具体物 抽象物 有生物 無生物 有情 人間行動 現象

これをならべ変えてある程度補ってみると

- などとなるが、これはもちろん試みであってどのようにも変えられる。全体が林大氏の「分類語彙表」に似ているのはその考え方から出発したからである。ほんとうはこのような大分類から小分類へうつる、系統分類でなく、もっとこまかいままにしておいてたとえば次の図のようなネットワーク構造をとるのではないかと思う。



この図もまた全くの試みである。しかしこの図でわかるように、具体物はさまざまなものに対して関連している。だからこのままでの階層的な分類は不可能であろう。このメルクマールは多次元的で多重に交差した分類になっている。syntaktisch あるいは semantisch というだけでなく、他の要素たとえば stylistisch なものなどものはいろいろであろう。この種のメルクマールは名詞 N_1 , N_2 , N_3 ……と動詞 V_1 , V_2 , V_3 ……との交点において成立するものを基本とするけれども、その交点のありかたはさまざまでありうる。決して二次元ではないのである。

次に「新聞用語調査」の結果の上位語について、この書き入れを行なってみよう。(これは一種の辞書になる)

0 (+num), 1 ("), 2 ("), 5 ("), を(enclitics), 3(+num), に(enclitics), 4(+num), は(enclitics), が(enclitics), て("), 6 (+num), と(enclitics), 8 (+num), 9 ("), 7 ("), 一("), 二("), 三("), する(V, +hum. action), 万(+num), 五("), いる(V, +hum. action), ある(V, ±concrete), 円(±concrete), こと(+abstract, nominalisation), ない(A, +NEG; AUX, +NEG), 時(+time), なる(V, +abs.), +(+num), 東京(+loc. proper noun), 六(+num), 者(+hum, bound form), 区(+loc. almost b.f.), 月(+time, almost b.f.), 年("), この(AR, demonstr.), 八(+num), お(+hom. pref.), 七(+num), 的(suf. formative), 第(pref.), 四(+num), 分(+time, almost b.f.), m^2 (+space, b.f.), もの(+hum; +abstract), その(AR, demonstr.), 人(+hum), 他(+abs.), 会(+hum. coll. almost b.f.), 日本(+loc. proper noun), 才(almost b.f.), 九(+num), 員(+hum, suffix), なっ(V, +abs.), 二十(+num), 回(almost b.f.), 歩("), 部("), 名(+ling. almost b.f.), へ(enclitics), 前(+loc.), 駅(+loc.), ため(+abs.), さん(+hum, +hon. b.f.), で(enclitics), 給(+abs.), 同(AR, pref.), 電(+concr. +ling.), や(enclitics), か("), 可(+abs. pref.), 町(+loc.), 株(-abs), これ(PR. demons), など(enclitics), れる(AUX, +pas), 大(pref. +abs), 歴(+hum act. ling.), KK (+hum, coll), 優遇(+hum. act.), 新(pref. +abs), 経験(+hum. act.), 工(+hum, b.f.), 化(±hum.

act, b.f.)……

これをメルクマール別に分けると、たとえば次のようになる。

+hum. ——人, もの, 者, 会, 員, さん, KK, 工

+hum. act. ——する, いる, 歴, 優遇, 経験

+linguistic ——名

+concrete ——円, 電(話), 株

+abstract ——ある, こと, なる, 他, ため, 給, 可, 化

+time ——時, 月, 年, 分

+loc. ——東京, 区, 前, 駅, 町

+num. ——0, 1, 2, 5, 3, 4, 6, 8, 9, 7, 一, 二, 三, 万, 五, 十, 六……

このようなメルクマールはシンタクティックなものであると同時に意味論理的なものでもあるから、以上のように一つの語彙記述が可能となるのである。それならばどのようなことが可能であるかを次に考えてみる。

3. 意味論的メルクマールと語彙記述

言語情報処理の研究として辞書を作成するということが、きわめて重要な作業の一段階であるということは、いうまでもないが、その研究のためには、文型の各ポジションに用いられる、用語の用いられ方について記述するということが重要であり、またげんにこの調査研究でもそのとおりに実行してきたのである。

このことは、用語調査、語彙調査としての立場からみても、全く有益かつ必要なことではないかと思われる。語彙調査は一つの語彙記述の方法であるが、従来の語彙記述は一つの静止した形での記述におちいりやすかったことは事実である。言語過程説の側からの批判はこの点において真に的を射たものであるといわなければならない。筆者がいままで行ってきたような分析は、これを一貫したような方法によるものであると考えている。すなわちこのような文型と用語との関連から用語を記述するのであって、用語の記述のなかに動態的なものを織りこんでいこうとするのである。

そこで、二つのことについて、ここでふれておきたいと思う。一つは今まで語彙の特性についていろいろな試みがなされていたことについての関連であり、もう一つは語彙記述の本質にふれることである。

まず、用語調査で得られる層別あるいは使用度数別の語彙の各グループがどのような分布を示すかということである。たとえば新聞の用語調査で、上位のグループをとりあげてみたとする。名詞の大部分は+num. で、+time, +loc, +hum. がこれに続く。これは恐らく新聞というインフォメーション・メディアが負わされている、コミュニケーション・コンテンツの性質からくるのであろう。このことは「新聞用語と雑誌用語」において筆者がすでに述べたことであるが、この方法ではそのことが一層はっきりと記述できるのである。これは分類語彙表を使ってもできるが、分類語彙表という記述方法は語彙を分類したものであるから、よほどくわしく分類したものでないかぎり、効力がおとる傾向がある。すなわち用語の一つ一つがもっているすべてのメルクマールのあるところに、用語を出しておかなければならない。しかもこのメルクマールは互いに重なりあっていることは生成文法でも説明しているが、さらに一種のネットワーク構造をもっているらしいことは筆者が予見したところで、もしこの予見が正しいとすれば今までの流儀では「分類」ということがなかなかむずかしいのである。一つの用語がいくつのメルクマールをもっているかということが記述できたとすると、あるメルクマールをもつ用語がどれとどれであるか、を記述することができよう。そのような記述にてらして、「語彙」たとえば新聞用語というようなものの特性を述べることができ、かつそれが有効な記述となることが期待されるのである。

このことはさらに他の面についても追求すべきであろうが、手もとにデータがないためと、紙数の都合で、このくらいにしておくことにして、次に語彙記述の本質について述べたいと思う。

すでに述べたように、各用語各レクシカル・アイテムの統辞・意味論的メルクマールについて記述し、逆に同じメルクマールによってレクシカル・アイテムを集めることができる。しかもこのメルクマールは、互いに重なりあい、入

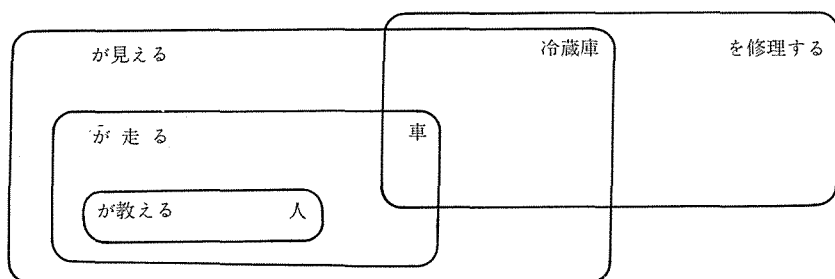
りくんで関係しあっている。このことをこのように記述できれば、それは一つの語彙記述となるのである。たとえばいま「見える」「走る」「教える」「修理する」という動詞と「人」「自動車」「冷蔵庫」という名詞があるとする、と、「見える」という動詞の「が」の前は「人」「自動車」「冷蔵庫」の三者が来得る。+ visible というメルクマールが働くからである。「走る」については、「が」の前にくるのは「人」「自動車」がふつうである。「教える」という人間行動では「自動車」と「冷蔵庫」は「が」の前にこない。「修理する」の「を」の前では、逆に「自動車」と「冷蔵庫」が前に来ることができ、「人」についてはいわないのである。これを図に書くことができよう。

このような例は、いまメルクマールと用語の関係がわかりやすいことをむねとして出したのであるが、この例のばあい、一語一語別々になることから、逆に、この種の分析が、無限に分化して終わらない可能性があることを予想させるのである。しかし、実際多くの例について調べてみると、そこにかんがりのかたよりがあって、もちろんその作業が大きなものではあるが、近似的な方法でアプローチするとすれば、あるところでまとまりそうな感じがする。これをいま数値で示すことができないのは残念であるが、それこそ、語彙の実態調査である語彙調査と結びつくことの意味がそこにあるといえよう。そのなかでの必要な課題である理由もそこにある。たとえばいま「集める」という動詞の「を」の前がどんな名詞で補なわれるかをみると、いろいろな語が来そうでありながら、新聞用語調査では、

社長ら、中堅幹部、学者、権威者、学生、人、観衆、観光客などの「人」、
関心、信頼、智恵、注目、声、歌、メロデー、話題などの人間精神活動、
押目買、成行買、小口買、など人間活動自体
人気、票、寄付、ずいひつ、レポートなど 人間活動関連、
材料、資料、あるいは草など材料、自然物

などとなっている。新聞というマス・メディアのにおいが感じられもするが、この分布にかたよりがあるのは事実である。ある動詞がどんなメルクマールをもった名詞と結びつくかという、いわば定性的な研究とともに（このなかです

でに定量的な見地がはいっているが), どのように多くあるいは少なく用いられるか, という定量的, 計量的な研究が含まれ, 活用されてよいと思う。そうしてそのような定量的な研究が, さきに述べたような細分化されたメルクマールをある程度(近似的に)まとめ直し, その数を縮少するということも考えられるだろう。もちろん生成文法でやっているようにメルクマールどうしの包含関係を考えてみる必要があるであろう。



ここで生成文法の考え方を借りて考えてみると, スタンダード・セオリーによれば, 深層構造成立以前のベース・コンポーネントにおいて, 語彙がかかわる部分があるようである。すなわち基礎となる句構造と下位分類規則によってレクシコンのなかから語がひろいあげられる。そういう文法に立たなくても, 多くの語彙のなかからいろいろな条件によってある一つの用語が選び出されるということも考えられるだろう。南不二男氏のモデルは選択という項目が一つ加えられて, 一層総合的になっている。Computerlinguistik においてもさまざまな立場が考えられるが, 多くのモデル, システムにおいて, 生成文法の考え方をある程度とり入れているふしが見られる。ここでもある程度同じような語彙の記述の方法が考えられてよいのではないかと思う。このようにみると, さきのように, 各用語について一つまたはそれ以上の統辞意味論的メルクマールを考え, 逆に一つの統辞意味論的メルクマールからそれに属する語をひき出すことができるように記述する, あるいはそのメルクマールどうしの関係も考えてみるということが, 語彙記述の重要な方法であり作業である, ことができよう。たとえばレクシカルアイテムについて

人（人間，有情物，走行可能，可視……）

車（機械，－有情物，走行可能，可視……）

.....

のようにいくつかのメルクマールがつくとともに，メルクマールでまとめると，

可視 {人，動物，車，冷蔵庫……}

走行可能 {人，動物，車，……}

有情物 {人，動物}

のようになり，さらに

〈有情物〉＝〈動物〉 | 〈人間〉

のようなメルクマールどうしの関係も考えるのである。この記述が全言語理論のなかにあって用語が選出され使用されるメカニズムを説明しうるものであろう。

そしてこのような記述がたとえば動詞の用法の記述を基礎として（それからだけではないが）生まれてくるものであることはいうまでもない。

再びいうけれども，このような記述が，言語の生きて動くすがた，働くすがたを求めようとする方向に合致するのである。ここに語彙論のもっとも重要な課題があるものと考えられる。このようなメルクマールにはある種のかたよりがあるから，再びもとにもどって，一種の分類語彙表のようなものも考えてもよいだろう。その際，今までのものと，ある点で基本的に異なっている。まず第一に，そのようにして作られる分類語彙表は実際的なものとしては近似的なものになるであろう。第二にたとえば「代名詞」のごときは，「抽象的關係」を表わすものではなくて，他の名詞に代わりうるものであり，「ここ」「そこ」などは+loc. の名詞に代わりうるものであり，「きみ」「ぼく」は+hum. に代わりうるものである。それは広い意味での pronominalization の時にその作用を受けるのである。副詞などの役割の記述も，この意味で重要な課題となる。第三に，分類項目としては，「時」「所」「人」「行動」など一連の先述の要素が，同等の資格で大分類項目として登場しよう。そうしてこれらはネットワークとして関連づけられることになろう。

語彙論をこのような見方で考えてみると、これに生成語彙論という名前を与えるのも一つの案であると思う。生成語彙論という名前は林四郎氏が大分以前に命名されたものである、筆者の内的な論理の発展から、この名前をいただくのである。生成語彙論は生成文法論に対立するものではなく、そのなかにふくまれるものである。生成文法論は「文法」の名から誤解を生じやすいが、そのなかに音韻（音形）も語彙も含めた全言語についての理論であって、語彙論、音韻論に対立するものでない。生成語彙論は生成文法論のなかにあり、その一部に位置して、特に語彙的な面に焦点をあてているものとなろう。この面のしごとは今まであまりよく整理されておらず、かつ大きな作業を要するものであるから、この命名は適切なものであると考えられる。そればかりでなく、とかく語彙を文法から切りはなして考えようとする、従来の立場の人々に対しても説明に便利な命名である。

国語問題、言語政策の立場からみても、用語の運用を考えるということは重要であると思う。運用をはなれ、用語の表からだけ得られた政策は、実際使用にあたって問題を生じることがありうるからである。この点からいっても生成語彙論は国語問題と大きなかわりをもつのである。

4. おわりに

以上のように述べたところで、筆者はさまざまな遍歴をへたすえに再びもとの出発点である筆者の「言語の意味と言語情報処理」に立ちもどった感じである。幸いにもやや眺望をことにするをえた。これから従来のデータを整備増強しつつ、再び新しい用語調査による分析を続けて、この欠陥にみちた記述を補正し、増補し、リファインしていきたいと思う。この論文はそのようなスパイラル状の前進をする上で、indispensable なものであった。

以上のような理由で、ひとくぎりがついたところで、この研究を進めていく上でお世話になった方々にお礼を述べておきたい。国立国語研究所の岩淵所長、林大前部長、林四郎現部長をはじめとして、第一資料、第三資料、言語計量の各研究室の方々のご指導、ご協力がなかったら、このデータは得られなかった

のである。種々お力添えをいただいた和田弘氏にもお礼をのべたい。直接この論文のための分析と執筆はフランスで行なわれたので、グルノーブルの機械翻訳グループ(CETA)のB. ヴォーコア(VAUQUOIS)所長に謝辞をささげなければならない。特にこの論文のために用いたデータの作成者として、国語研言語計量調査室の堀江久美子、桜井(当時)敏子、小高京子、下山いくよ、沢村都喜江の諸嬢および沢田さち子夫人にもお礼を述べたい。

また宮島達夫「動詞の意味・用法の記述的研究」からも恩恵を受けている。動詞分析のときと、原稿執筆の時点で重なりがあり、筆者の身の事情であまり十分な活用ができなかったのが残念である。鈴木重幸・南不二男両氏の「話しことばの文型」は資料がないため利用できなかった。井上和子「変形文法と日本語」はあとから続んで啓発されるところが多かったが、これまでの分析で直接役立てることができなかった。以上いずれのばあいにも論文内容の記述に重なりが多いことをおわびする。

参 考 文 献

国語研究所「分類語彙表」(林大氏担当)

宮島達夫「動詞の意味用法の記述的研究」

井上和子「変形文法と日本語」(「英語教育」連載中)

渡辺 実「国語構文論」

南不二男「一つの言語モデル—仮説 ν 超問」(「計量国語学」64号)

大久保忠利「日本文法の心理と論理」

ヘルビヒ(岩崎ほか訳)「近代言語学史」

S. YAMADA: Trois aspects des groupes verbaux japonais, GETA.

S. YAMADA: Certaines propriétés des verbes japonais, GETA.

J. Bechert et al.: Einführung in die generative Transformationssgrammatik.

付編 小語彙分類表

この論文で述べた方法によって作業を小範囲で進めてみた結果を次に記述してみたいと思う。これは新聞語彙調査で得られた代表的な動詞二百語について、助詞「が」「を」「に」を中心としてつくるシンタグマの構造を調べ、名詞をある程度整理して（+humain については「人」という語で、+concret については「荷物」などに代えたことが多い）、合計約千語の表を試験的に作成してみたものである。名詞の選び方は、機械翻訳への応用を考慮して、たとえば人間の行動を示す名詞として「研究」「実験」などを他の語に優先して取りあげてある。同種のメルクマールをもつ語に置きかえることが、かなり可能である。たとえばそれらを「恋愛」「結婚」などに。そこで、小範囲の語彙表であるが、同じ作業手順をふむことによって、あとから特定の手順によって増補することが可能であると考えている。小範囲ではあるが、ある程度全体の見通しはつけたつもりである。

この表は名詞と動詞しか含んでいない。しかし林大氏の『分類語彙表』でも名詞と動詞を合わせると全体の六分の五に当たる量になるので、これに「語彙分類表」の名をあえて与えることにした。性状言や接続詞感動詞については別の機会に分析したい。

この表の作成に当たっては宮島達夫、井上和子両氏の前述の論文をかなり大幅に利用させていただいた（論文本編とこの表の作成時は2か月以上のひらきがある）。語彙分類の方法そのものは、現在までの動詞の分析をもとにしたものではあるが、考え方と作業の過程で、林大氏の『分類語彙表』から受けた恩恵は非常に大きい。単語の並べ方でも、そのまま襲用させていただいたところが多い。異同の理由、ほかの並べ方の可能性、その他語彙分類の原理などについて、他の分類語彙表とも比較しつつ、後日機会を得て、あらためて考えを述べたいと思う。

この分類表は直接機械翻訳研究のために作成したものではあるが、この表を上記のような方法で補正することによって、そしてそれを一種のもののさしとして利用することによって、雑誌の用語、新聞の用語、教科書の用語などの性格

を比較，記述することが可能であると考えている。

この語彙分類表は方法の性質上必ずしもいわゆる「類義語表」であることを直接にはねらっていないが，現在はソ連のアプレシヤン同様，それに近づくことを期待している。語彙表作成にあたっては小異を捨ててグループ化したが，将来は語数の増加とともにグループのなかでの相違を取りあげてゆきたいと考えている。

この論文執筆時と付編執筆時とは時間的にずれがあり，本編原稿は日本送付後だったので内容に行き違いがあるところがあるが，あえて修正しない。二つの異なった分類があってもよいからである。

略語。dep=déplaçable（移動可能），con=concret，vis=visible，phen=phénomène，cpt=comptable，rtl=relatif à temp，mes=mesurable，N=名詞，V=動詞 表中，=で説明したものはここにあげない。

【名詞】

HUM (=humain) +anim, +con, +vis, +dep.

1. 人，人間，友人，父，こども，検査員，学者，代表者
2. （代名詞化）彼，私，だれ
3. （時数）一人，二人

ANI +anim, +con, +vis, +dep. 動物，猫

CON (=concret) +vis, +cpt が多。〔V は HUM の具体的な行動が多〕

1. もの（動詞連体形なども受ける）
2. （代名詞化）これ，それ……
3. （+dep）荷物，品物，物資，製品，生産物，陳列品
4. （+dep, +qui fonctionne ou tourne）機械，装置，ミシン，タイマー，

時計, 歯車

5. (quisonne) ブザー, 警報器
6. (qui donne lumière) ランプ, 電灯
7. (+dep, +dynamique, +vertical) 汽車, 電車, 船, 飛行機
9. (+loc, +vertical) 建物
10. (+ouvert-fermé) 戸, 窓, ドア
11. (+dep) 道具, ナイフ
12. (+dep) 台
13. (+dep) かばん, はこ, かぎ, ボタン
14. 設備
15. (+dep, +ling) 新聞, 本, 手紙, 旅券, 文書, 郵便
16. (+comestible, +dep) 食物, ごはん, 料理
17. (+buvable, +liquid, +dep) 飲物, ジュース
18. (+dep) 衣類, 洋服, くつ(+debas), 帽子(+en haut)
19. (+dep, +mince) 紙, 布
20. (+dep, +long, +transformable) ひも, コード
21. (+dep, +matériel) 材料, 原料, 資料, トランジスタ, ガラス
22. (+dep, +produit agric) りんご, 米

以上 on peut produire

23. (+dep) ごみ
24. (+dep, +long) 棒, 線, レール(+prod)
25. (+dep) 石
26. (+liquide, qui reflète) 水, 油
27. (+dep) 氷(+liquéfiabile), 雲
28. 雨, 雪(+liquéfiabile)
29. 火, 煙(+dep)
30. (+dep) 土
31. (+loc) 山

32. (+loc, +liquide, qui reflète) 川, 海
33. (-cpt) 空
34. (+loc, qui donne lumière) 星, 月, 太陽, 彗星
35. (+phen) 地割れ, さけめ, 爆発, なだれ, 火事
36. (+plante) 木, 桜 (+vertical), 枝, 葉, 花
37. (+dep) 手, 頭
38. (+mes, +lumière) 光
以上 visible
39. (+mes, cinq sens, qui sonne) 音, 声
40. (+mes) 風
41. 空気

LOC +vis, +con, +cpt. [「に行く」などの前]

1. ところ (「名詞+のところ」「動詞など+ところ」で場所化), 場所
2. 位置 (+ordre) 点, 上, 下, 右, 横, 外
3. (+prod) 門, 入口, 道 (+long), 駐車場, 岸, 港
4. ヨーロッパ, 東京, 太陽系
5. (+hum) 学校, 会社, 工場, 研究所, 家庭, 政府, 軍, グループ, 町, 地方
6. (代名詞化) ここ, そこ……

ACT [「する」「できる」が続き, 「を」を介して「はじめる」「つづける」など時の移行に関する動詞に続く。また「ひきうける」「望む」「要する」などに続く。「に」の前で目的を示す。]

1. こと (名詞化), しごと, 活動, 作業
2. 準備, 整備, 整理
3. 対立, 差別, 反対, 改善, 中止, 許可
4. 注意, 注目, 期待, 決意, 信頼, 誤解

5. 調査, 研究, 試験, 実験, 計算, 教育, 会合, 開会, 検討
6. (+ling) 報告, 発表, 討論, 提案, 批判
7. (+mes) 発注, 注文
8. 賃上げ, スト
9. 婚約, 食事

RAC (=relatif à action) ふつう—vis [N の意味上 V は人間の行動を示すものが多い。N の意味は行為の結果あるいは行為をうけるものなど。名詞化は「こと」]

(質, +contenu) 考え, 考え方, 思想, アイデア; 方法, 手段; 態度 (+état)
; 対策, 具体案

2. (質, +contenu) 見解, 見通し, 意見, 予想, 感想
3. 疑問, おそれ
4. 興味, 関心
5. 責任, 自信
6. 親しみ, 楽しみ, 共感, 味 (cinq sens), 感じ (cinq sens équivalent)
7. (+ling, 質, +cpt) ことば, 文章, 論文, 否定論, 礼, 予報, 情報
8. 物理学, 数学
9. 音楽, 美術, 映画
10. 経験, 歴史, 実績, 成果, 資格
11. 手間
12. (cpt) 日程
13. 制度, 法律
14. (cpt) 金
15. (cpt) 財産
16. (cpt) 需要, 利益, 物価, 費用
17. (phen) 問題
18. (phen) 事件, 事故, 紛争, 革命

19. (état) 平和

20. 病氣

ABS (=abstract) 多く -cpt

1. 事実, 実態, 正体, 性質, 性格, 本質, 真理, 法則

1' 現象 (phen)

2. 状態 (état), 状況, 実情

3. 内容 (+contenu)

4. 要素, 基礎

5. 関係, 関連, つながり

6. 相違, 違い, 個性, 距離, 差

7. 理由, わけ, 要因, 原因, 結果

8. 効果, ききめ

9. 害, 弊害, 支障

10. 動き, 傾向, 反応

11. 回復, 経過, 成長 (état, rtl), 発展 (état, rte), 進歩 (état, rtl)

12. (+cpt) ばあい, 例, 例外, 機会

13. (loc 的, +direction) 方(方向化), 方向, 東

14. 形 (état)

15. 限界

16. 重点

17. 均衡 (état), まとまり

18. 等級, 型, グループ

19. (ordre) 順序, トップ, 地位

20. 品質

21. (+cpt, +mes) 数, 人口

22. (+cpt, +mes) 体重, 温度, 寒さ, スピード, 距離

23. (+mes) 力, 圧力, 体力, 婦力, 実力, 威力

24. (+cpt, +mes) 割合, たしからしさ, 可能性, 程度, 生産性
25. (+ratio) 大部分, 大半, 多数, 少数, 三割
26. 余剰
27. (時数) 一, 一つ, 二……

TEM (=temps) 時数(多) —vis〔動詞の名詞化は「時」。疑問代名詞は「いつ」。〕

朝, 夜, 春, 年, 日, 時間(cpt), 時刻, 期日, 時代, 梅雨, シーズン

QAL (=qualité) 性状言的。ここでは体言にもなるものの例。

必要 困難

【動詞】

INTR—1. 「に, を」をあまりとらない自動詞

N [hum が主] が働く 困る

N [con 一般] が 見える へこむ 折れる (N long が) まがる (N long が)
とまる (N dep が) まわる (N qui tourne が) あく (N ouvert-fermé が) 傾く (N vertical が) 倒れる (N vertical が) ゆれる
こわれる

N [con 自然物] が ぬれる 澄む (N liquide ou gezeux が) 晴れる (空など
* が) 曇る (同左) 縮む 伸びる 凍る (N liquide が) 死ぬ (N anim が)
枯れる (N phante) 生まれる (N anim が) 茂る (N plante が) 咲く (花あるいは草木名) 燃える 吹く (N con40 が)
降る (N con28 が) 照る (N qui donne lumière が) 光る (同左)
輝く (同左) 消える

N [ACT が主] が 始まる 続く 終る できる

N [TEM] が 明ける 暮れる 経つ 遅れる 過ぎる

N〔ABS, RAC〕が する(N cinq sens が) 深まる わかる まさる(N mes)
劣る(N mes) すぐれる(N mes)

N〔ABS, RAC, CON その他〕が 異なる 要る できる 足りる(N cpt) 減
る(N cpt) ふえる(N cpt) 増す(N cpt) 集まる 分かれる
くるう

INTR—2. 「に」をとる自動詞

N が N〔Loc〕に (V-dep) いる(N anim が) ある(N いろいろ が)
立つ(N vertical が) 残る 現われる(N con が) 生ずる(N phen
が)

N が N〔Loc〕に (V+dep) 動く 行く 来る 出る(N から も) はい
る 着く 進む 走る(N anim, dynamique が) 飛ぶ 落ちる 下
りる 流れる

N が N〔con〕に 写る(N 水面などに) つながる 加わる(N mes が)
つく さわる ふれる あたる 乗る(N dep が N dyn. 台などに)
ひびく(N qui sonne が) もれる(N liquide が) しみる(N liquide
が) 浮く(N dep が N liquide に) 沈む(同左)

N〔自由〕が N〔自由〕に なる 似る

N〔hum〕が N〔hum〕に 会う

N〔自由〕が N〔ACT〕に 値する

N〔hum〕が N〔ACT〕に 当たる

INTR—3. 「を」を取る自動詞

N〔大体 hum, dynamique〕が N〔loc が主〕を V(動作など) 曲がる 通る
向く(N direction も)

INTR—4. 形式的

N〔自由〕に かかわる 関する つく よる

TR—1.

N [hum] が N [con] を 用いる 使う (以上 2, NACT に も) 作る (N matériel で N fab を) 備える (N 主として fab を) 発見する 見る 持つ (手などに) 取る (N dep を) たたむ (N plat を) あける (N ouvert-fermé を) 閉める (同左) こわす (N fab を) 燃やす (N combustible を) 引く (N dep を) 積む (N dep を) 重ねる 倒す (N vertical を) 傾ける (N vertical を) 分ける (N dep を) 離す (N dep を) 混ぜる (N dep を) まとめる (N dep を) 集める (N dep を) 食べる (N comestible を) 飲む (N liquide を) 脱ぐ (N con 18 を) 着る (N can 18 を) 穿く (N con 18 de bas を) 浴びる (N liquide を)

N [hum] が N [ACT] を 行なう する やる 計画する 引き受ける 休む 阻む 始める 続ける 終わる 要する (N いろいろ が)

N [hum] が N [hum] を 呼ぶ 教える 訪ねる 待つ 追う なぐさめる

N [hum] が N [ABS, RAC など] を 思う 考える 読む (N ling) 聞く (N ling) 知る 感じる 調べる 決める 選ぶ 示す 重視する (N いろいろ) おこす (N phen) 呼ぶ (N-hum が RAC 16 など を) 変える 占める (N-hum が N loc, ratio を) 保つ (N état を) 防ぐ 失う

TR—2. 「に」をとる他動詞

N [hum] が N [hum] に N [±ling] を (あるいは、文と) 言う 述べる 書く 話す 報告する 発表する 教える 要求する すずめる

N [hum] が N [hum] に N [con] を 見せる 渡す 送る もらう (N hum から とも) 与える 貸す 借りる (N hum から とも) 売る 買う (N hum から とも)

N [hum] が N [loc] に N [con, dep] を 置く すえる 敷く はさむ 重ねる 並べる, あげる, さげる